2021 年度　第 44 回ドイツ現代史学会　開催ご案内

各位

立秋の候、天候不順が続いておりますが、皆様如何お過ごしでしょうか。

さてこの度、以下の要領で第 44 回ドイツ現代史学会を開催いたします。新型コロナウイルスの感染拡大が続く中、今年度も「Zoom ウェビナーによるオンライン方式」にて開催する運びとなりました。このような状況下ではありますが、皆様におかれましては是非ともご参加くださいますよう、お願い申し上げます。

なお参加をご希望される方は、下記の通り「事前参加登録用フォーム」に必要事項を記入の上、期日までに学会運営委員会宛お送りください。

2021 年 8 月 20 日

2021 年度　第 44 回ドイツ現代史学会　運営委員会
磯部　裕幸（中央大学）
川喜田　敦子（東京大学）
大下　理世（東京大学）
石田　勇治（東京大学）

2021 年度　第 44 回ドイツ現代史学会
（共催：東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター）

日時：　2021 年 9 月 18 日（土）・19 日（日）

場所：　「Zoom ウェビナーによるオンライン方式」にて開催

参加方法：　下記「事前参加登録用フォーム」にアクセスし、必要事項を入力のうえ送信してください。フォーム送信後、ご記入頂いたメールアドレス宛に自動返信機能で「確認メール」をお送りします。さらに大会数日前までに「Zoom ミーティングルーム」の URL、および当日配布資料を格納したファイルのリンクをメールにてお知らせいたします。参加申し込み締め切りは **9 月 14 日（火）** です。

事前参加登録用フォーム：　https://forms.gle/YEVbBTFMTTE87Ni98

プログラム：やむを得ない事情により変更される場合があります。

第 1 日目：9 月 18 日（土）　開場（Zoom）：14 時 20 分　開始：14 時 30 分　終了：17 時 40 分（予定）

シンポジウム「学問と政治の関係を考える」（登壇者敬称略）

14：30～14：40　問題提起：磯部裕幸（中央大学）

14：40～15：10　第①報告：隠岐さや香（名古屋大学）

アカデミーと「自由」―18 世紀パリ王立科学アカデミーの理念と実際

15：15～15：45　第②報告：野口雅弘（成蹊大学）

ドイツ社会学会（1909-1934 年）における学問と政治―「価値自由」の行方

15：50～16：20　第③報告：伊豆田俊輔（独協大学）

東ドイツにおける公共性と党派性

＜休憩 20 分＞

16：40～17：40　質疑応答

第 2 日目：9 月 19 日（日）

午前の部　開場（Zoom）：9 時 45 分　開始：9 時 55 分　終了：13：00（予定）

自由論題報告 **（各報告 40 分＋質疑応答 15 分）**（報告者／司会者敬称略）

10：05～11：00　河合竜太（同志社大学・院）／司会：長田浩彰（広島大学）

第一次世界大戦前ベルリンにおけるシオニズム―男性史研究の視点から

11：05～12：00　井上健太郎（大阪大学・院）／司会：北村厚（神戸学院大学）

シュトレーゼマン以前のドイツ外交―ラパロ条約を中心に

12：05～13：00　川﨑聡史（日本学術振興会特別研究員（PD）／司会：水戸部由枝（明治大学）

西ベルリンにおける自治的な共同保育施設「キンダーラーデン」

―68 年運動以後の新たな保育運動に関する考察

午後の部　開場（Zoom）：13 時 50 分　開始：14 時　終了：18 時（予定）

書評会

桑原ヒサ子（著）『ナチス機関誌「女性展望」を読む―女性表象、日常生活、戦時動員』

（青弓社・2020 年 9 月）

（登壇者敬称略）

14：00～14：05　趣旨説明：磯部裕幸（中央大学）

14：05～14：35　第①報告：姫岡とし子（東京大学名誉教授・奈良女子大学）

14：40～15：10　第②報告：中野智世（成城大学）

15：15～15：45　第③報告：石井香江（同志社大学）

＜休憩 15 分＞

16：00～16：30　著者リプライ：桑原ヒサ子（敬和学園大学名誉教授）

＜休憩 10 分＞

16：40～17：30　質疑応答

ドイツ現代史学会総会

17：40～18：00　今年度運営委員会からのご挨拶

会計報告

次年度開催校・運営委員のご紹介　等

（問合せ先）

2021 年度　第 44 回ドイツ現代史学会運営委員会

中央大学文学部　磯部裕幸（doitsugendaishi44@gmail.com）

（学会第 1 日目シンポジウム　開催趣旨）

「学問（教育）と政治の関係を考える」

2020 年 9 月に発足した菅内閣が、日本学術会議の推薦する新会員候補任命を拒否した問題は、広く「学問の自由」をめぐる議論へと発展した。そこでは特に「日本学術会議法」に関する政府の法解釈、また任命を拒否した具体的理由、さらには学術会議のあり方などに関心が集まっている。

その中には、戦後の日本において広く受け入れられてきた「学問の社会的責務」ついての理解に大きな変更を迫るものもあり、今後も引き続き注視する必要がある。

さて、こうした議論を通じて浮き彫りになるのは、「学問（学者）」が「政治」に対してどのような関係を構築すべきなのか、ということのように思われる。今日、多くの大学が国庫からの補助金に依存している現状からすれば、学者が「政治」とはまったく無関係なところに身を置くことは不可能である。しかし「科学」が「政治」との適切な距離を見失い、学問だけでなく国家の衰退を招いた例も少なくない。こうした歴史は、個々の研究者が専門領域を越えて知っておくべきだろう。

本シンポジウムでは、主に歴史学の分野において「学問の価値」や「社会における学問の役割」について研究成果を発表されている方々をお招きし、こうした問題について考える機会としたい。